回顧録

本誌同人辻部圓三郎氏より寄贈されたる藝人譚の一片であります不思議な事には本誌創刊の前年則ち明治三十一年三月の談話なるが全く命がけの譚であります、藝にも精神にも修養の資となります。御精讀を乞ふ。（編輯子）

桐竹紋十郎の談話（一）

左東柳水編

文は故紋十郎の實子にして三代目吉田辰造の門流たり夙に出藍の聞え高かりしが舊幕府掉尾の宰相たる水野越州が激烈なる改革に遇ふて江湖に流浪する事三十年、行路難山又河に漂ふて死に瀕する幾十回殆んど人世の辛苦を嘗盡し甚だしきは糊口と戰ふの急なるより穴堀大工の賤役を採りしことさへありしが斯道の蘊奥を探ること片時といへども怠る事なくその技遂に古今の名手と稱へられたる故、三代目吉田文三郎を凌ぐに至り當時文樂座を脊負て立つ大逵物となれり、其の技藝の妙所に入りしは別に論らふまでもなく目下浪花の人氣俳優たる多見之助、巌笑、かほる（故璃寛、時藏の如きも）等の如き興行毎に同人を訪て其指教を受るといふにても推知するを得べし。編者紋十郎文を其の僑居に訪ふて所見を尋ねしに快辯滔々天馬空を馳するの概ありて其經歷談の如き變幻怪絶鬼走り魔驚くの奇觀を極め宛然活百物語の態ありき。

私が紋十郎でハイ人形芝居に就ての意見ですか、夫は恰好幸ひ私しも何時かは貴君方に氣焔を吐て見たいと思つて居りましたのでアハ……サズツと此方にお寄り下さいお噺は近くないと行けませんから、其何ですよ、人形芝居に就ては只今の所實に哀れな有様で、私共は常に嘆はしく思つて居ます、云ふ迄もない事ですが淨瑠璃の本家といふのは私共の方なんで通例の芝居でするデン〳〵ものは私の方の受賞です、デスカラ

批評の批評？

面目一新大飛躍の本誌を禮讃す

東京　河野國聲

樋口吾笑老兄へ久し振りで讃辭を書きます老人の多い斯道では、若輩に屬する小生も貴老と識つてモウ二十年になります。其間の親疎は小生の淨瑠璃熱の上下と、貴紙の内容の高下と、貴老の活動振りの緊緩と、いろ〳〵に支配されて、必ず一定とは言はれませんでした。

然し吾笑老の性格を知り、主義を識り、斯道に對する指導精神と相通ずる點斯道に頭數多しと雖も小生程のものは、そうタントはあるまいと自ら以て任じ合ふ程の仲だといふ事は貴老も知つて居られる筈です。それがどうも最近チグハグになつて親しく語り合ふ機會もなく、廻らぬ筆を曲げて投書する程の勇氣も出なかつた事は、ヤハリ滿たぬ思ひが有つたんですれ、それは口ば

哘は人形芝居といへば中々見謗のあつたもので興行をする看板の眞中に

元祖御免御操 日本第一諸藝諸能の司 冠代上座

と斯いふ風に掲げたものです、普通の役者は河原ものと賤められたもので彼の市川家中で一番威かつたと今でも好劇家の語草になつて居ります、五代目團十郎が「錦着て疊の上の乞食かな」と詠だのを見てもわかります、ですが我々人形遣となると帶刀をして歩いたものです。デスカラ隨て名人上手も中々有たのです、中にも三代目吉田文三郎といふ人なんぞは……初代は吉田冠子といふ淨瑠璃作者の倅でした、其の三代目は古今の名人で忠臣藏の由良之助などは前代未聞といふ評判でした、今でも由良之助の紋は二ツ巴になつて居ますが彼れは文三郎の紋です、幸四郎の仁木彈正が非常に巧かつたといふので未だに仁木の紋を高麗屋の紋にして居る樣なもので、それは千本櫻の忠信の紋になつてゐる源氏車も矢張り三代目文三郎の替紋だつたそうです、其位の名人なばかりでなく氣象も中々威い人で彼の鍬倉三代記ですな、彼は云ふ迄もなく德川家と豐臣家の確執を書いたもので北條が家康公です、夫で佐々木が眞田幸村を當たものですが其鎧の胸金物などに六文錢を用ゐたのは此人です、六文錢は眞田家の紋所で是を付れば幸村といふこと一目にして分ります。何しろ今と違ひまして其頃の幕府といふものは大した勢のもので罷り間違へば打首獄門といふ事は分つて居ます、夫を六文錢にしなければ三代記の趣旨が分らなくなると云ふて生命を擲出して遣つた人です、實に威いものでありませんか、夫に此節のものは何です、只木偶を振廻すといふのみです、只此大阪で文樂座にのみ餘喘を保つて居るといふのも强ち無理ではありますまい、それに昔しの人の殘した型を眞似てるばかりですから人形に精神といふものがありません、自體通例の芝居の振付といふのは皆私共の人形遣がしたものです、餘り古いことは知りませんが、有名な阪三津

かり達者で、頑固で、發展性の無い斯道に呆れてか、千遍一律式の貧紙の編輯法に倦きてか、理由はいろ〳〵あらうが一番の問題は樋口老兄の生命たる雜誌內容の如何といふ事だつたらうと思ひます。

又かと思つて封を切つた本月號（堀川のお後の言葉で言へばこの記事を讀む人には先月號になる）は、第一活字の組み方が讀み易くスッキリして來た事で、遂目を通して見やうかと言ふ氣になつた事です。

第一に文樂座合評、鴻池サンは先年文樂の古靭師の部屋で紹介されてから知つた鴻池の御曹司、森下氏は大正十何年頃か日東レコード會社の專務時代住吉の氏邸で晋笑老と同行でお目に掛つて以來辱知の斯道の權威者四人の三人迄が馴染の人達故でもあるまいが、座談する人達が達識の人々故、遂引摺られて紋下の沼津の件を讀み、岡崎を讀みました。讀んで共鳴したのか、聽き方が同感で有るか自分の氣持ちを言つて貰つて居る樣に感じ乍ら、又多々啓發指導され乍ら、ダン〳〵腹を据えて讀み通り、次で太宰氏の岡崎評を外出の車の中迄持ち込んで讀み續けた。——そしていろ〳〵の感

歌右衛門、半四郎、其頃の人形師大田屋鱗造から振付を仕て貰ひそれより下つて芝瓢は辰松六三が御當地で額十郎は辰松兼三が又浪華の大太夫と云はれた古今の女形の名人富十郎は吉田辰五郎がいづれも振付をしましたので振付は皆な人形師の受持たものです、夫が今は何です、何と嘆かはしいものではありませんか。

はア藝道の修行をした御噺ですか、是に就てはなか〳〵面白い……まア小說にも是位の事は滅太にありませんね、私の親爺は門十郎と云つて矢張り人形遣でした故不斷小供の時から見聞して居るものですから其芝居が好といふたら御噺になりません、尤を踏まへてもアヽラ怪しやなとギツクリ見えを切る位でありましたが親爺は何いふものか眞地目な商賣をしろと云んで最初は難波の或る醬油屋へ丁稚奉公に遣られましたが何して辛抱が出來るものですか二日目に駈出しました、夫から心齋橋の砂糖屋、上町の摺鬼屋などに遣られましたが孰れも駈出して來るものですから親爺も仕方なく三代目吉田辰造の弟子にしてくれました、慥か十四五の頃でしたらう、サア本望を達したのだから嬉しくて堪りません。一生懸命に木偶を振廻して居ましたが其頃清水町の能勢山席といふ說教祭文の人形遣となつたこともありました、其内に水野越前守樣の大改革で興行物といふ興行ものは殘らずゴタ〳〵で實に火の消た樣な有樣です、其所で親爺が又々到底人形遣では行末の見込がないと云ふんで御當地で私の人形遣になる事を封じられると上つたりです、シタが考へると親の慈悲ですな、けれども其頃は血氣盛りナニ茲ばかり日が照るものか米の飯と天道樣は何處へ行つて付て廻ると其頃恰好是も人形遣で吉田才治といふ人が信州の飯田で興行して居ると聞ましたから跡は野となれ山となれと云ふんで鼻唄交りで飛出したのは私が十六の時でした、デ、出掛けて行つて才治に頼みますと手もなく入れてくれました夫で同所の河原に十八間四面の小屋を設へ興行しまと田舍のことですから珍しいといふので古今の大人。今度は其所を打上げて松本で興行しますと茲でも大入です、夫から北越の方へ出やうと云んでま

想の湧くまゝに十二月十六日の多忙の朝、氣持のまゝに原稿用紙に走らせて居るんです。

一體彗太夫の文句は事實を脚色した、或は創作の樣な狂言であり綺語でもあらうがあの短い文章語りの間に、樣々な場面の變化と人情の機微を連續させて、聽衆の心裡に訴へる處にあるので、芝居や人形で實演すると一番よくわかるんです。

人形や芝居で見た人が、素淨瑠璃で聽くと演者の技倆次第では、芝居や人形以上に眞に迫つて來るんです。太宰氏の評は芝居を引合ひに出して居るので、大阪人以外全國の讀者は興味深く讀まされた事と思ひます、淨瑠璃人はやゝもすると芝居を貶すが現代芝居で淨瑠璃劇を上演しなかつたら淨瑠璃はモツト淋れて居る事であらう。名優の役々を思ひ浮べ例に取つての批評は適當であると思ふ。

古靱レコードの忠六を聽いて、これだけの登場人物は到底現代には揃へられぬと嘆息した二十年前の自分は又、現在までも常に芝居を見て古靱一人切力だけの役者を揃へて芝居を見度いと思ひ續けて居るんです

づ差當り高田と見當を付まして出掛る途中の善光寺で麻疹を煩ひました、けれども私なんぞは未だ小僧ですから所持金も碌にありませんし駕籠になんぞは無論乘れませんし又滯留して療治する事も出來ませんからヨロ〳〵しながら道中をしましたが、是がそも〳〵ヘマの始りです、夫でも何やら高田へは着ましたが其時は連中が三十人程麻疹を煩ひまして旅宿が泊てくれません。夫でも餘儀なく賴みまして馬部屋に入れて貰ひましたがイヤ臭いの何のとて御嘶になりません。加之も氣分は惡し其内に十人程死ましたから私も初めてアヽ親の罰が當つたのだいよ〳〵茲で旅路の彌お陀佛になるのだと觀念して居ますと世界に鬼はないと申しますが、其旅宿の主人を崎田屋と云ひまして私が年若で惱んで居るのを氣の毒に思ひましたかいろ〳〵心配をして深切に介抱してくれましたからお蔭で麻疹も癒り生命だけは取止ました、一座が此の有樣ですから中々興行所でありません、其内に矢張り越後の柏崎で顏役をして居る山田喜助といふ人が連中を買に來ましたから得たり賢しと云ふんで同所に乘込み笠島屋彦兵衞といふ旅宿屋に宿を取りました、スルト惡い時は惡いもので將軍家の御上洛と云んで諸興行ものが殘らず差止になつたばかりでない、其山田といふ俠客が信州の松本へ一座の荷物即ち興行の人形衣裳等を受取に參りまして止せば良いのに持前の袁玄道を遣ますと又運惡く連戰連敗といふ有樣で持て行た金なら宜しいが我々一座の荷物まで押へられる事になりましたから、縱しやお差止にならないからとて興行が出來ません、茲で興行が出來ないばかりなら宜しいが荷物を玉なしにされては河童が水を放れた樣なもので何することも出來ません、其内に旅宿料は溜る、止むなく座頭の才治が自分の一人娘を藝妓に賣り大阪へ人形や衣裳を仕入にいつた騷の所へ持て來て、代官所から旅人を長く泊て置く事ならんと云ふので所拂を仰付られました。それで一座はチリ〳〵バラ〳〵私は浪華太夫といふ太夫と三味線彈と三人連で當はありませんが新潟へ行たら何かなるだらうと云んで、同所を立退ましたが、時候が惡うございます、其時が十月

人形に魂が入ると一口に言ふが、人形が達人の語りに一致すれば魂が入つたので、語りを無視して樂をすれば、其矛盾や相違が形式的のチグハグに成つて生きぬ動きになるんです。聽衆の耳から入る音と、目で見る形や色とが頭の中で一致しないからです。（今コンナ事を筆が書き出したが、當否は先輩や專門家に任せます）極端に言へば古靱の岡崎を經芝居三十枚に書いて見せても、舞臺の人物が動かずに動き、魂が入つて叫ぶに違ひない。要するに人形は無表情だから却つていゝんだと思ふんです。私はよく歌舞伎芝居の最高級品を本行のテンポで影し、例へば寺子屋一幕を動きの變化每に寫眞に撮影して、幻燈式に製作映寫して大夫に語らしたら、大夫はトランク一つ持つて滿洲、支那迄興行出來、人形無しに素淨瑠璃で打てぬ現在を嘆くには當るまいと思つて居るんです。（吾笑曰く、十年以前知己中尾阿彌也君が計畫したのが則ちこれである。現在は休息して居るが念願貫徹の時機を狙つて居るものと信ず、阿彌也君明あり と云ふべし）

それは扨置き、芝居や人形を見た目には

二日で、聲にも北國の雪といふ位で早や平地が一丈あまりの雪でございました、サア先ヅお茶を一ツ、是から實に不思議なことがありますよ。（以下次號）

阿波鳴門八ッ目

竹本南部大夫

三味線　鶴澤重造

十二月二十六日午後九時より都市放送で聞く　同人　森下辰之助

南部太夫久し振りの放送、先づ無難と云ふ事が出來る、此人近頃其心的作用に一變化を起した樣に思ふ、と云ふのは、あとからひよつこり現れた伊達大夫が其美聲を買はれて三十年近くも修行し漸くこゝまで來た自分と同樣の取扱ひを受けて居るのを不平とせず、なまじ及ばぬ聲の競爭を捨てゝ氣分や情や足取りで大成せうとする傾向が其技藝の上に見へて居る、よい心がけである、今後益々怠らず研鑽して欲しい、然し此本筋の修行は從來の聲に對する自負心を根底から捨てしまつて、自分は決してよい聲じやない、惡聲だ、難聲だ、天分は少しもないものだと決心して一文一句忽かせにせないで一考又一考を煩はすべきである、南部君、君はおつると三ふ人形に對してどんな考へを持つて居られるか、おつるは諸々方々と尋ね歩き、野に寢たり、時には人の家の軒の下に寢てはたたかれたり、悲しい事やらこわい事に出逢ひながらも、只父母に逢ひたいが一心の、實に何とも云へぬ可憐至極な小供ではあるが、矢張り何處までも無邪氣な小供である事を忘れてはならない、抑も「順禮に御報謝」の始から憂ひ氣味や泣聲を出す樣では小供の無邪氣さがない。殊におつる自身がませた口調や憂ひの情で物を云ふては却て聞くものにははわれさが思はれない、無邪氣に小供らしく云ふて居る內に例へば「人の軒の下に寢てはたたかれたり」とか「逢ひたい事ちや」と云ふ樣な處でたまらずに泣き出す方が聞くものには却て可愛想になるのである。今を距

素淨瑠璃な聽いて、舞踊面な聯想する樣に本誌の記事を見て、文樂座の人形も大夫も聽衆の感じも、皆想像出來たといふ最高の深玄微妙の樂しみをさせられた事には、平凡な大發見をした次第です。

先月小生も支那の歸りに急行で梅田から文樂へ飛込んで、古靭一段聽いて又汽車に乘り込み、金三圓なにがしかの岡崎で有つたが、それに四人の合評を付加し、太宰氏の理解を添へられて樣々の指導精神まで頂戴して、一册四十錢では、今日の雜誌こそ斯道人に取つて安い有り難い雜誌はありません。

恐らく自分以外にも本誌を大切に保存し伊賀越を語る時、習ふ時、再讀三讀して指針に仕樣と思ふ者は澤山有るに違ひないと思はる。

只「批評に感情が有つてはならぬ」とは同人諸氏の態度で判つて居るが、批評される人達は皆感情が昂まつて居るんだから、冷靜な批評が事實は冷靜でないのであつて評者も言葉遣ひを軟かにする。被批評者も感情抜きで善惡共一應咀嚼するといふ事こそ望ましい事だと思ふんです。